

Title	啓明會第十八回講演集
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.4 (1926. 11) ,p.167(627)- 168(628)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

これは、たゞ其の會の催された地方の人々位に限り、遠隔の地の人、或は其の他の事情ある人には、直接に益を與ふる事がすくない。そこで親しく觀覽の人はもとより、觀覽し得なかつた人々の爲めにも便宜を計つたものが、その展覽會目錄印刷である。此の目錄が頒布されると、其れに従つて、遠隔の人でも、その陳列品の大要を推察して、參考となる處が少くない。史料展覽會に、目錄の印刷せられぬ事を往々見受けるが、經費の許す限り、是非印行頒布せられたいものである。

さて前記武庫地方郷土史料展覽會目錄は、大正九年十一月に、武庫神職團の主催により、西宮市西宮神社事務所に於て、陳列せられた郷土史料展覽會の目錄で、本年七月増補再版せられたものである。史料は、左の十部に分類せられ、且つ其の主要なるものには、簡単に解説が附記されて閱者の便を計つてある。

石器、銅鐸、古墳出土品——各新圖會、地誌、書籍——社寺關係——民政史料——檢地帳及制札類——産業交通に關する史料——著名なる人物及舊家の遺品——地圖繪圖類——雜件——附錄

猶ほ挿圖十五が挿入してある。

附錄は、更に——武庫郡内の國寶、武庫郡及西宮市内の特別保護建造物、内務省指定の史蹟、延喜式内神社、武庫といふ名義に就いて、——に分けられてある。右の名義に於ては、諸説を掲げ最後に冠辭考の「難波よりつねに向はるゝ所なる故に向山といふか、向つ峰、向つ國など古へ多くいひたり」と吉田博士の説なる(地名辭書)「武庫、原各向と云ふ事最も信ずべし。日本書紀に、

向津比賣とあるは、即ち武庫郡廣田大神なり。當時西宮廣田の邊を向津と稱せるならむ云々」を引いて、最も妥當なる見解による解釋であると記されてある。

最後に、本會は、有益な展覽會を催し、且つ目錄を頒布せられた武庫郡神職會に深甚の敬謝意を表す。(武田勝藏)

啓明會第十八回講演集

昨年、琉球に關する展覽會及び講演會を開催して、南島研究につよい刺戟を與へたる啓明會は、今年アイヌに關する講演會を開催して、北方民族のためにつくされた。本書は、その際の講演集であつて、まづ柳田國男氏は『眼前の異人種問題』に於いて、弱小民族の人口減少が、わが國のごとき人口増加に苦しむものよりも一層痛切なる問題であること、アイヌと我々との關係が、非常に密接にして、重大なるものであるにかゝらず、我々が、アイヌに對して、從來あまりに冷淡であり、その政策の間違つてゐたこと、今後は、正しく且つ深い學問によつて、完全なる人道の法則によつて、誤れる帝國主義を正し、異民族の救済に當ることが、日本のごとき特殊の境遇にある國家の豫定せられたる任務であることを説かれた。ついで金田一京助氏は『アイヌ研究の現状』に於いて、過去に於けるわが國及び西洋のアイヌ研究學者の業績を一瞥し、つぎに、氏自身が、アイヌ研究に一新生面を開かれたところの叙事詩の研究についてのべられた。『アイヌの生活と博物館のアイヌ品陳列棚』に於いて、八田三耶氏は、札幌博物館に於け

るアイヌの諸道具・衣類・その他風俗に關する品々が、現實のアイヌ生活と非常に遠ざかつてゐるほど、それほどアイヌの生活が變化したことを夫々の例證をもつて説かれたもので、なほ同氏の『白老コタンのアイヌの生活』と題する活動寫眞の説明、及び伏根弘三氏の『アイヌ生活の變遷』とともに、アイヌの生活に關するものであり、最後にジョン・バチラー氏は『アイヌ語の本質』に於いて、地名や、植物、動物、魚類の名稱を分析し、その意味、組立などを説明した。講演者は、いづれも、アイヌ研究者の權威、もしくはアイヌ自身であるから、その講演が、興味と示唆とに富めることはいふまでもない。要するに、わが日本民族構成の一要素であり、現在世界の民族研究に、重要な地位を占むるところのアイヌに對して、新に研究の刺戟を與へられた啓明會の企に、吾々は感謝するとともに、更にわが領内に於ける異民族として、當然吾々の研究に入らねばならない臺灣の生靈に對しても、同様の企の實行せられんことを希望してやまない。(松本芳夫)

明治維新史講話

藤井甚太郎著
雄山閣發行

本書は、現に、維新史料編纂會として、同事務局に於て、その史料の編纂に従事して、重要な新史料を手にせられたる機會多く、又京都大學文學部講師として、維新史の講座を擔任し、多年の研究を講述せられる著者が、さきに、大正十三年山口縣下に於ける講演會にて、明治維新史を講演せられた節の講本に、若干の筆鉞を加へて、印行せられたものと云ふが、同史の概要を極めて

明確に説述せられたもので、同種著書中異彩ある良著で、筆者の如きは、本書によりて啓發せられたる處多く、著者に滿腔の敬謝の意を表呈するものである。

著者は、維新史の區劃時代に關して、種々の點より考察して、嘉永六年、米國水師提督ペリー渡來より、明治四年廢藩置縣に至る十八年間を以て、本紀の時代と定め、前後數年間を前期の時代後期の時代と心組して説述せられて居る。本書は、第一社會組織—第二幕末時代の諸思想—第三社會缺陷と社會變革の兆—第四社會動因の續出—第五諸勢力の分離—第六諸社會の參政と安政の大獄—第七諸勢力分散の初期—第八政權分離—第九統一運動の傾向—第十明治社會の消極的成立—第十一明治社會の積極的發達—第十二明治初期の社會現象—の十二編に分つて演じ、これを更に章節に細別して説き、外に緒言と結論、並に第十三編の年表が附せられて、その論述せられる處は、従前と異なる點もあり、興味を深からしめるものである。

筆者は、本書一讀の節、一つ物足りぬと思つたものがあつた。それは、同史上重要人物の筆跡、或は肖像の類の挿入で、若しそれが若干適所に挿入してあつたならば、筆者のみならず、一般讀者も亦同様に一層興味と參考を與へられる事がまた少くなかつたと思ふ。

要するに、本書は、菊版三百余頁の手ごろな本であつて、維新史研究者は勿論の事、この時代の歴史に興味を抱かれる文藝方面の士にも、亦一讀の價値ある著書として推奨したいと思ふ。(武田勝藏)